

川柳 さいたま



平成27年

2月号 (No.663)

日川協加盟

巻頭言

花燃ゆということ

願法みつる

この年の新たな大河ドラマが始まった。花燃ゆ、とは心沸き立つ題名である。幕末から明治にかけて西欧諸国に対応しながら、国家という姿を強く意識した日本人の至誠の物語とすれば、今の時代に思いを重ね合わせてみたくなるのは、私だけだろうか。

大河ドラマを取り込む吟社恒例のさいたま大会での課題頭出しでは、「花燃ゆ・長州藩・松下村塾」を引用した。ドラマの主人公が女性と言うことなので、第一部では女性選者を多くお願いした。乞うご期待である。

ところで昨今、大会選者の質を云々する風聞が多い。その言わんとするところの真意は、参加柳人の皆さんは、疾くご承知のことであろう。選の良否は選者の特権ではあるものの、聞くに堪えない披講を聞かされることは悲惨である。結局、参加者も亦お人好しな日本人なのだが、柳歴や経験の長さが選者として望ましい人格と隔離し始めた時、檜山を思ふべきであろう。だが選者は、自らの人格を絶対視するのも悲しい事ながら性である。

ドラマ花燃ゆに、時代の変革を推し進める年代感覚を学びたいものである。老いたるものも、次に続くものも、日本という国、政治という修羅場、川柳という文芸界に、今まさに幕末の息吹が必要なのではないだろうか。

日日是好

願法みつる

落ち武者の背に必勝の幟旗

ご先祖の蹴鞠の技が今に活き

惚けながら中庸という道の幅

老けてよし自己責任に皺の数

猿雉子をつれてあの世へ征くつもり

親は子に介護せよとて生まざるを

檜山で老いらくの恋サレコウベ